

Newsletter 16

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第16号/2010年7月15日発行

Contents

巻頭言	思う存分斬っていただくために……
特集I	教養研究センターを斬る! これからの教養研究センターと自然科学研究教育センター／狭義の教養から総合的 人間形成へ／高等学校との連携／実験場としての教養研究センターの役割
特集II	出版物から見るセンターの軌跡 選書シリーズ
活動予定	教育 GP「身体知を通して行う教養言語力育成」始動／極東証券寄附講座 生命の教養学／身体知の実験授業、正規科目へ～全身を使って考える・行動 する・学ぶ／文学の実験授業：ワークショップ「Alfred Tennyson, “The Lady of Shalott”」の創造的解題：英語版創作をめざして」のお知らせ
活動報告	2010 年度春期公開講座：実験で学ぶ気象の教室（～6/12）を終えて／教員サポー ト／2010 年度春期公開講座：パッパ～深遠なる魂の響き～を聴く（～7/3）を終え て／日吉行事企画委員会（HAPP）春学期の活動
事務局より	



Foreword



思う存分斬っていただくために……

教養研究センター所長
横山千晶（法学部）
Chiaki Yokoyama

2002年に教養研究センターが開所して、すでに8年。いや、まだ8年。ようやく8年。2代目所長として2004年から教養研究センターとともに歩んできた年月を振り返ってください、と言われれば、どの瞬間も冒険で、遠い道のりで、険しかったりさわやかだったり……とどうしても表現が陳腐になってしまいます。しかも目標に向けての終着点はまだまだ先の気配です。

問いを変えてこの8年間に成し遂げてきたことは何だったのか、と聞かれると、時間さえいただければそれなりにお応えできるものの、それは問いへの「応え」であっても「答え」ではありません。このセンターがどんなことをやっているのか、どんなことができたのか、何をどのようにやっていくべきかという問いに答えるのは容易ではありません。中枢にいて動かしているつもりになっている人間ではないからです。「こんなことをやってきたし、やっている、そしてこんなことを成し遂げた」といくら当事者が声高に話しても始まりません。やっていることがまわりにきちんと見え、アドバイスやご意見をいただけるかどうかが問題です。また、成し遂げたことが良くも悪くもインパクトをもっていたか、多くの方たちにその成果を認めていただけたか、というと、まだまだ教養研究センターにはひと暴れできる余地があると思います。

もちろん今まで、外からの励ましやご意見をいただかなかったわけではありません。創立5年目（正確には5年7ヶ月目）が

過ぎたとき内部・外部審査を行い、さまざまなご批判とアドバイスをいただきました。どちらの審査にも塾内の大勢の教職員の方々や学生さんが参加してくださったのが印象的でした。暖かな励ましと同時に厳しいご指摘もいただいたし、こちらの死角を目前に提示していただきもしました。その時に内外から指摘された問題点でいまだに解決できていないものもたくさんあります。各プロジェクトの内容の客観的な評価、メソッドの確立とその評価体制、モデル構築とその汎用性の確認……。どれもまだまだ途上です。むしろ自分たちなりの答えが出せたもの、その成果を高く評価していただけたものも数多くあります。

大きな組織だからこそ、物事は簡単に動くものではありません。歩き出そうとすると、その一步一步が非常にしんどいときもあります。しかし一緒に歩いてくれる仲間がたくさんいます。だからこそセンターという場所は、解決する場所ではなく、解決しようあがく場所なんだ、それも「楽しく」あがく場所なんだ、という認識が培われ、その楽しさが教養研究センターの土台です。あがいているうちにふっと解決の糸口が見えたことも数多くあります。しかし、もっとも大きな問題は、その楽しくあがく姿がまわりから見えているかどうか、いえ、「お、やってるな」と認めてもらえているかどうかです。結構これこそが一番の問題でしょう。

「教養研究センターを斬る!」。ちょっと自虐的なタイトルですが、斬ってもらうことはこちらの行動を見ってもらうこと。弱みを突かれる、ということは弱点を見つけて指摘してもらうこと。切り刻んでもらうことはじっくりとおいしいところ、まずいところを味わいつくしてもらうことです。そう、「もっともっとあがけ」と発破をかけてもらうことです。だからこそ早速痛く気持ちよく斬られたいと思うのです。

皆さん、刀の用意はいいですか?!

これからの教養研究センターと自然科学研究教育センター

教養研究センターは自然科学研究教育センターからすると大先輩にあたる存在です。自然科学研究教育センターは2009年に発足しましたが、教養研究センターは2002年に既に設立されています。また、所員の規模も自然科学研究教育センターの数倍あります。自然科学研究教育センター設立の際には、教養研究センター設立時に所長であった羽田先生がいろいろ教えて下さり、感謝しています。私自身も教養研究センター所員でもあることを断っておく必要があります。

教養研究センターと自然科学研究教育センターを比較すると、教養研究センターはその名の通り、「教養および教養教育にかかわる総合的な研究」を行うセンターです。それに対し、自然科学研究教育センターは文字通り「自然科学の研究と教育」を行うセンターです。広義とはいえ自然科学に特化している自然科学研究教育センターと、教養研究センターとは分野的な違いがあります。さらに、方向性としても、教養と教養教育という明確な方向性を持った教養研究センターと、純粋なアカデミックな研究から実用を目指した企業との応用研究、教育まで推進する自然科学研究教育センターとでは大いに異なります。

教養研究センターについてすごいと私が感じるのは、最近のワークショップ、「慶應『動く教室』～体と頭を刺激する健康コミュニティ～」や山形県で「庄内（鶴岡）セミナー」を毎年開催しているダイナミックな行動力です。このようなプロジェクトを続けていくことに必要な労力は並大抵のものではありません。

このように異なる2つのセンターは基本的に相補的な関係にあると考えています。まだ模索中の面もあり、外からは明らかではないかも知れませんが、現在も良好な協力関係を持っていると私は信じています。これからさらに公式、また非公式にさまざまな面で協力し、両センターの構成員が行いたい事業を実現していきたいものです。

（自然科学研究教育センター 青木健一郎）

教養研究セン

狭義の教養から総合的人間形成へ

忌憚なきご批判・ご提言を、とご依頼いただいたので、忌憚なく述べたいと思います。命名された方には申し訳ないのですが、私は以前から「教養」研究センターという命名に疑問を感じていました。「教養」という言葉には、自分の仕事には関係ない知識や能力として文化について身に付けること、というニュアンスを感じるためです。何か、実際に役に立つ学問とは隔絶した、お坊ちゃん・お嬢さんのための知識供与のような意味を感じてしまうからです。これは、教養研究センターに対する批判ではなく、「教養教育」という大学低学年教育への一般的な命名に対する違和感の表明なのですが。

とはいえ、協生館で行っている日吉での大学院教育と、同じく日吉での大学低学年教育は、何かいろいろな意味で補完関係にあるはずだ、という思いのもと、教養研究センターの活動に参加させていただくようになってから何年かが経ちます。

で、結論から申し上げますと、私の「教養」という言葉の解釈は、ここでの意味よりもはるかに狭かったことを日々反省しています。私の所属するシステムデザイン・マネジメント研究科の理念は、あらゆるものごとをシステムとして俯瞰的に捉え、本質的な問題を大きな視点から解決できる人間を育てること。「木を見て森も見る」ことのできる総合的な人間の育成です。そして、「教養研究センター」の「教養」とは、実はそれと同じ意味なのだとは最近に感じています。これまでに私が体験した、脳科学と文学の混合授業、ミニマルダンス体験、地域と一体になったフィールドワークなど、教養研究センターで行われている活動は、単なる狭義の教養ではなく、まさに、生きるための総合的な力の基礎について、学生と教員が一体となって考える場だからです。私自身、多くのことを学びましたし、ここ日吉から、教育・研究・活動が一体となった新しい大学のあり方を発信すること自体に新しさを感じています。ここ、総合的人間形成の拠点から、これからも新たな知と学びの発信を！

（システムデザイン・マネジメント研究科 前野隆司）

高等学校との連携

先日、寿町の「カドベヤ」で実施されたワークショップと、芝の家で月に一度実施される「ハーブ喫茶」に高校生たちを連れていきました。平日の放課後と土曜日という日程にも関わらず、予想より多くの生徒達が参加しました。

高等学校では現行カリキュラムから「卒業研究」の授業で多くの生徒が論文を書くようになり、また3年次の選択科目では担当教員の専門性を生かした科目を自由に設置するようになったため、教育内容が高等教育により近くなり自由度が増したといえます。

しかしながら、それぞれの授業は単体として存在し長期的な視野で目的意識を持って実践がなされたり問題意識を共有し今後のビジョンを描く、といったことはほとんどされていません。ここ数年で来往舎での映画の上映、講演会、企業訪問や資料館見学など実施してきましたが、個々の実践の連続性、継続性、さらにそれらを俯瞰し総括することはなかなかされず、課題は多く残されています。

高校生により豊かな学びの場を提供することを考え「教室の外にある面白いこと」「学問ごとの枠を超えて知的好奇心を満たすこと」「アカデミズムと現場との連携」を念頭に置いたとき、教養研究センターの実践は多くの魅力と可能性をもっています。現在は教養研究センターの活動の一環に高校生がお邪魔させていただく、という段階ですが、同じ日吉キャンパス内という立地を生かして、今後は高等学校が教養研究センターと連携をとり、高大連携で学びの場を共有することも視野に入れていきたいと考えます。高校生と大学生が実験的で自由な雰囲気の中で共に学ぶことで、高校生は大学生から、ただキャンパス内で講義を受けるだけではない一歩先の自分の姿をイメージすることができ、学問に取り組むという姿勢を学ぶことができるのではないのでしょうか。また大学生は高校生から、十代半ばから後半ならではの瑞々しい感性や柔軟な思考から多くのものを得るのでは、と期待しています。（慶應義塾高等学校 原田亜紀子）

ターを斬る！

実験場としての教養研究センターの役割

三田キャンパス所属の教員から見て、教養研究センターの最大の魅力は新しい教育研究プロジェクトの実験場としての役割です。その活動は自然科学分野における卓越した「研究室」にも通じる創造性に富み、また半学半教という伝統をよく体現しているという印象を強く持っています。その意味で、学部や専門領域を超えた交流の居場所を作りにくい三田キャンパスにおいても、センターの実績は優れたモデルになり得るのではないかと、というのが私の考えです。

もっとも、センターの実験授業やワークショップの多くは、文字通り実験的な性格を持つものですから、そこに参加可能な学生数は全体から見ればきわめて限定されていることは言うまでもないでしょう。しかし、「ごく少人数教育」の効果がそのまま「ごく少人数」の範囲に留まるのかといえば、決してそのようなことはないと思います。たとえば、三田のゼミに「アカデミック・スキルズ」で経験を積んだ学生が一人存在すれば、その鍛えられたパフォーマンスは短期間のうちに他の学生に模倣され、伝播していきます。実験的な試みは実験のままだでも相当な波及効果を発揮するのであり、その意味では無理に制度化を狙って推力を失うより、熱意のある学生を巻き込んで、挑戦的でコスト度外視の実験を繰り返すことの方がむしろ重要なのかもしれません。

しかし他方で、個人的に最も残念なのは、その伝播の力が今のところ学生任せになっているということです。お互いに他のキャンパスに無関心なのも義塾の伝統と言えるかもしれませんが、教養研究センターの洗礼を受けた学生の教育を引き継ぐ者に、センターが目指す挑戦の意味や重要性をいかに伝えるか。それがセンターにとって、そして義塾全体にとっても重要な課題であるように思います。

（商学部 牛島利明）

出版物から見るセンタ

教養研究センターが2002年に発足して以来、センターは多分野・多領域にまたがる教養と教養教育のあり方を模索し研究する活動を推進し、未来への知の継承と発展に貢献することを旨としてきました。当センターの所員は、教員であると同時に研究者でもあります。教育と研究を両輪の活動として、学術研究に努めるとともに、教育の場にも還元をし、学生との知の交感によってより豊かな教育と研究の場を創出するバックアップをしたいと願っています。「教養研究センター選書」は最新の研究成果を、学術論文とは異なる切り口で学生諸君をはじめとする読者に発信し、新鮮な知の一石を投じることによって、研究・教育相互の活性化を目指す目的で設立されました。選書の名前は*Mundus Scientiae*、ラテン語で「知の世界、学の世界」という意味です。2004年に選書第一号が世に送り出されて以来、ほぼ毎年1冊のペースで出版されています。2008年度は残念ながら応募がありませんでしたが、2009年度は3冊同時の刊行が叶いました。日吉キャンパスで開催された多様な企画を研究としてまとめられた選書が2作含まれているのが、今回の特徴です。図像や写真、資料の紹介、文献案内を充実させることが本シリーズの眼目のひとつですので、講義や少人数セミナーの副読本にもご利用いただければ幸いです。今年も原稿を募集いたします。どうぞ奮ってご応募ください。(不破有理)

事前申し込み締め切り: 2010年7月30日(金)

表題と目次などによる著作概要を提出

原稿締め切り: 2010年9月24日(金) 原稿は40,000字程度

お問い合わせは toiawase-lib@adst.keio.ac.jp へどうぞ。

これまで出版された選書

- 2004年 桜井準也著『モノが語る日本の近現代生活—近現代考古学のすすめ』
- 2005年 井上逸平著『ことばの生態系—コミュニケーションは何でできているか』
- 2006年 武藤浩史著『『ドラキュラ』からブンガーク血、のみならず、口のすべて』
- 2007年 常山菜穂子著『アンクル・トムとメロドラマ—19世紀アメリカにおける演劇・人種・社会』 (慶應義塾大学出版会、700円【税別】)



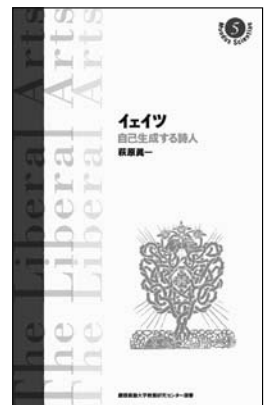
教養研究センター選書 5

『イエイツ——自己生成する詩人』 著書紹介

20世紀の英語圏で最大の詩人のひとり目されるイエイツは晩年、シュタインハ手術と称される若返り手術を受けました。創造的営為とセクシュアリティの表裏一体性を標榜する彼は、性的能力の減退と共に詩的想像力が枯渇しても、何らかの手段を講じて性的能力を蘇生させれば、これに伴い詩的想像力も復活すると考えたためでした。術後の結果は不明ですが、手術をきっかけにして詩人が新たに旺盛活発な創作活動を再開し、自他共に認める最高の作品を数多く執筆したことは、まぎれもない事実です。

イエイツは元来、自発的に自己を自力で改造することを希求していました。そんな彼にとって、自己の中に自己の精液を注入し、精液を閉鎖的な自己の身体内で生理学的なエネルギーに転換するという、いわば自己授精を目指すシュタインハ手術は、格好の手段であったに違いありません。

一見したところ、作者と手術理論とを結びつける糸など見当たりませんが、両者を注視すると、双方をつなぐ結節点として「自己生成」というキーワードが浮上してきます。この点を踏まえてイエイツ作品を読み直してみれば、「自己生成」のイメージがここかしこに散りばめられていることに気づきます。拙著は、この「自己生成」のイメージが特に後期イエイツ文学において重要な役割を果たしているかを、作品を詳細に検証することによって明らかにすることを目的としています。(萩原眞一)



ーの軌跡 選書シリーズ

教養研究センター選書 6

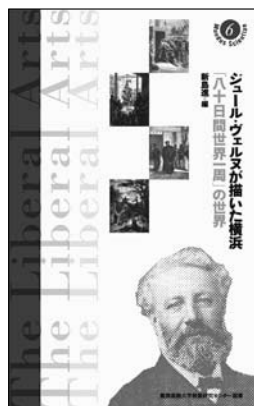
『ジュール・ヴェルヌが描いた横浜 ——「八十日間世界一周」の世界』 著書紹介

横浜が開港したのは今から約 150 年前の 1859 年。ついに門戸を開いた極東の港町を、フランスの作家ジュール・ヴェルヌは、大ベストセラー小説『八十日間世界一周』（1872 年）のなかに登場させています。しかし横浜を訪れたことのないヴェルヌは、一体どうやってこの港町を描いたのでしょうか？ また、その描写は当時の横浜、ひいては日本の姿をどのくらい正確に伝えているのでしょうか？ ——そうした問いに答えるべく、私は数名の若手研究者の協力を募り、本書『ジュール・ヴェルヌが描いた横浜』を編みました。

第一部では、作家ヴェルヌのコンパクトな伝記と、『八十日間世界一周』の成立過程を紹介。続いて、同作品の日本での受容を概観し、その過程で慶應義塾が果たした役割にも触れました。第二部では、作中における具体的な横浜描写と、その際にヴェルヌが用いた資料、エメ・アンペール『日本図絵』を比較し、そこに生じた虚構と現実の齟齬を指摘。最後は、かつての横浜と現在の横浜の姿を多くの図版、写真を用いて対比させ、街並みの変遷を視覚的にたどりました。

グローバルゼーションが叫ばれる昨今、これに先鞭をつけた『八十日間世界一周』は今こそ再読されるべき作品でしょう。そして描く側／近代ヨーロッパと、描かれる側／近代化途上の日本が、横浜描写というテキストの場でいかなる衝突を果たしたのか、本書によってその現場に立ち会っていただけたらと思います。

（新島 進）



教養研究センター選書 7

『メディア・リテラシー入門 ——視覚表現のためのレッスン』 著書紹介

『メディア・リテラシー入門——視覚表現のためのレッスン』は、メディア・リテラシーの教室での利用可能性を視野に入れたユニークな啓蒙書です。現代のメディア・リテラシーは、メディアの批判的な読み方だけにとどまりません。既存のメディアのさまざまな可能性を活かしながら、批判的かつ創造的なメディアの作り手になることが、現代を生きる一人一人に求められているのです。

本書では、そのような「読み書き」のふたつの側面をバランス良く配置することに成功していると言えるでしょう。第1章では、ビデオ・アーティストの小泉明郎さんと英文学者の小泉有加さんが、ビデオ・アートの「読み方」と「作り方」について講義しています。共編者の坂倉杏介さんは、第2章では、マンガの「読み方」について考察を行っていますが、第4章では、即興映画の「作り方」について講義しています。第3章では、佐藤が、文学と映画のそれぞれの読み方についてまとめています。このようにさまざまなメディアを読み解きながら、同時にメディアの書き手としての可能性を考察し、実践している点に本書の新しさがあると思います。

本書の内容を基に、今年の「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ 批評と創作」では、横浜と川崎を舞台としたドキュメンタリー映画とオリジナル・スクリプトによる短編映画／ビデオ・アートの制作を行っています。ぜひ本書を読んで、みなさんも授業に遊びにきてください！

（佐藤元状）



教育 GP 「身体知を通して行う教養言語力育成」 始動

教養研究センターをハブとして本学で実施中の大学教育推進プログラム【テーマ A】（教育 GP）「身体知教育を通して行う教養言語力育成」は、昨秋始まりました。3 年計画の初年度である 2009 年度は準備的な年ですが、既に、全体シンポジウム「身体知と言語」や数々のワークショップやセミナーと共に、5 つに分かれたセッション——Ⅰアート、Ⅱフィールド・アクティビティ、Ⅲコミュニティ、Ⅳコミュニケーション、Ⅴ発信・評価・システムデザイン——で、実験授業（「体をひらく、言葉をひらく」や「編集スキルズ」）の実施、キャンパス外研修の実施、コミュニティ作りの学外拠点（横浜市寿地区）の設営、コミュニケーション WS の開催、評価システム作りの研究など多彩な活動が展開されました。また、本プログラムのウェブサイト（<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/gp/>）が構築されました。

2 年目となる 2010 年度は本格稼働の年です。Ⅰアートでは、レトリックの学習からキャッチコピーの製作に至る言語学 / 創作授業や、参加体験型音楽授業、狂言を題材として最後は学生主体の狂言公演に結実する授業、そして、文学を用いた数々の授業や企画（授業「身体知」、WS「Alfred Tennyson, “The Lady of Shalott” の創造的解題」、日吉ボエトリー・フェスティバル）が始まります。と同時に、映画の読解から創作に至る研究 + 創作型の授業（「アカデミック・スキルズ III、IV」）も試みられます。Ⅱフィールド・アクティビティでは、鶴岡キャンパスのある庄内に滞在して集中的に学ぶ「庄内セミナー」や社会学・地理学・都市メディアデザインのキャンパス外授業が実施されます。Ⅲコミュニティでは、学外拠点「三田の家」、「芝の家」、「カドベヤ」（横浜市寿地区）を中心として、「動く教室」など様々な企画の実施を通して社会連携がはかられます。Ⅳコミュニケーションでは、他セッションとも連動しながら、臨床心理学系合宿やコンフリクトマネジメント WS などが実施されます。セッションⅤ発信・評価・システムデザインでは、2009 年度に好評を博した「編集スキルズ」が通年の実験授業として本格実施されるとともに、2009 年度に仮構築された評価・システムが試行され、完成に向けてのフィードバックが始まります。

（武藤浩史）

【教育 GP 関連企画】

企画名	内容	日時・会場
「身体と言語」ワークショップシリーズ 「シェイクスピアを遊ぶ！」（第 2 弾）	「ワークショップ（身体）とレクチャー（言語）」を組み合わせた 2 日連続のシェイクスピア講座です。 猪突猛進シェイクスピア（『ロミオとジュリエット』）と優柔不断シェイクスピア（『ハムレット』）の双方を同時に味わってみましょう。	日時：7 月 17 日・18 日 会場：来往舎大会議室
キャンパス外活動拠点「カドベヤ」ワークショップ『慶應「動く教室」～体と頭を刺激する健康コミュニティ～』	「踊り」をこころとからだの健康増進という大きな枠組みの中で据え、複数の分野の一流の踊り手たちが慶應大学の先生たちと手を組んで新しい形のワークショップを試みます。踊りの経験の有無は問いません。初心者大歓迎です。	日時：6 月 15 日～9 月 28 日 毎週火曜日午後 7 時 会場：横浜市石川町 （通称：カドベヤ） 定員：各 15 名
アカデミック・スキルズ映像祭	アカデミック・スキルズのすべてのクラスの学生が集まる機会を「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ 批評と創作」が提供します。このクラスの春学期の成果であるドキュメンタリー作品を上映し、アカスキの学生のみなさんからフィードバックを受けます。	日時：8 月 1 日（日）13 時 会場：来往舎シンポジウムスペース
夏季集中講座「身体知——創造的コミュニケーションと言語力」	参加型・体験型の授業を通して、知力と身体感覚を相互的に磨き、大学の授業で重要な言語力と社会の先導者として必要な非言語的コミュニケーション力の双方を育む、未来志向の新しいタイプの授業です。	日時：8 月 9 日～14 日の 3・4 限 会場：来往舎 定員：20 名
ワークショップ「Alfred Tennyson, “The Lady of Shalott” の創造的解題」	本邦初の「シャロットの女」のワークショップです。五感を十分に用いて作品に向かい合い、表現する試みを 3 日間かけて行います。国内外の講師とともにアーサー王作品を作ってみましょう。	日時：9 月 6 日～8 日 会場：来往舎 中会議室
日吉ボエトリー・フェスティバル	①ボエトリー・リーディング（英語・フランス語・日本語での詩の朗読会） 言語を横断する実験的詩作品を読み、朗読し、演じ、翻訳することを通じて現代詩の多様性・可能性を体感しましょう。 参加予定者：フォレスト・ガンダー（アメリカ）、フランク・ヴィラン（フランス）、野村喜和夫（日本）、中安佐和子（日本／アメリカ）他 ②ボエトリー・ワークショップ 体を使って詩の朗読・パフォーマンスをする自由参加の実験的ワークショップ。 （講師：中安佐和子）	日時：10 月 29 日（金） 会場：来往舎 日時：未定 会場：未定

※上記企画の詳細は <http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/> でお知らせいたします。

【その他の企画】

「庄内セミナー」	「庄内に学ぶ「生命」—心と体と頭と—」を総合テーマとして開催してきた「庄内セミナー」は今回で 3 回目となります。今年度は『芭蕉が見た庄内の「生命」』をテーマとして開催されます。 詳細は http://keio-up.net/shseminar/ をご覧ください。	セミナー合宿（山形県酒田市） 日時：8 月 31 日～9 月 3 日
----------	---	---------------------------------------

極東証券寄附講座 生命の教養学

2010年度の「生命の教養学」は、昨年までとは構成を大きく変えて、理系と文系の対話というコンセプトに従い、理系と文系から一人ずつ傑出した学者を講師として招聘して、それぞれ一日5コマの授業を集中講義の形で行っていただく形式をとりました。講師は、京都の日本文化研究センターの小松和彦先生と、岡崎の基礎生物学研究所の上野直人先生にお願いしました。「異人」の概念から日本社会の文化人類学研究を行い、近年は妖怪研究を次々と発表なさっている小松先生と、突然変異における生物の形態の異常のメカニズムを研究しておられる上野先生のお二人です。両先生の打ち合わせを行って、「『異類』をめぐる理系と文系の対話」という主題を設定いたしました。

5月8日には小松先生が、構造主義人類学の基礎的な考え方を示され、説話や伝承などに見られる日本社会の「異人」について、構造主義の切れ味の鋭さを見せつけたお話をしたあと、「異類」としての妖怪が描かれた図譜の解説をされました。一週間後の5月15日には上野先生が、発生学の基礎を解説されたあと、形態異常がうまれるメカニズムを説明して最先端の科学研究の興奮を伝えるお話をしてくださり、実際の社会で生きている異常な人々を考える視座を与えてくださいました。5月22日には、両先生のお話をうけて、慶應日吉の教員でコーディネイターである鈴木忠・鈴木晃仁・宇沢美子が、それぞれの講義を行いました。

両先生の講義は、それぞれの研究の知的興奮を伝えてくださったものであると同時に、同じ問題について、深いところまで掘り下げて理系と文系が対話できるスペースを作り出したものであり、新しい形式の「生命の教養学」に手ごたえを感じさせるものでした。

(鈴木晃仁)



講義する小松先生

身体知の実験授業、正規科目へ～全身を使って考える・行動する・学ぶ

2005年度から始まった教養研究センター基盤研究「身体知プロジェクト」は、2006年度から秋学期に実験授業「体をひらく・心をひらく」シリーズを3回展開し、2009年度は「体をひらく・言葉をひらく」として開講しました。同時に2007年度から夏季集中実験授業「新しい文学教育」を毎年展開し、これら秋と夏季の集中実験授業と研究会を通して、身体知の意義、身体知教育のメソッド、評価方法を模索してきました。その結果、参加者の授業評価をもとに各学部にもその教育的意義を認めていただき、2010年から「身体知——創造的コミュニケーションと言語力」が極東証券寄附講座のひとつとして開講されることとなりました。本年度は夏季集中講座として8月の2週目に開催されます。講師リーダーは教養研究センターの副所長、法学部の武藤浩史教授。武藤教授は2007年度の第一回「新しい文学教育」の担当者として、その時の実験授業の内容を盛り込み、評論書『「チャタレー夫人の恋人」と身体知——精読から生の動きの学びへ』（筑摩書房、2010年）をこの5月に出版されています。著書からも伝わる2007年夏の知的興奮が今年も新たに沸き起こることでしょう。

(横山千晶)

文学の実験授業：ワークショップ「Alfred Tennyson, “The Lady of Shalott” の創造的解題：英語版創作をめざして」のお知らせ

9月6日～8日に日吉にて本邦初の「シャロットの女」のワークショップを開催します。坪内逍遙が翻訳したことでも知られる、19世紀英国の桂冠詩人テニソンの詩「シャロットの女」はその摩訶不思議な設定のため、多くの読者を魅了してきました。本ワークショップは五感を十分に用いて文学作品に向かい合い、表現する試みを3日間かけて行います。初日はまずじっくり作品を読み（わずか171行）、朗読を聴き、言葉が描く風景を想像し、自分の解釈を語り、グループで発表をします。さらに本作品を題材とする絵画や音楽を分析的に「読み、語る」過程を経て、創造的な作品制作への発想と手法の習得の場を提供します。文学から感得した自己分析の結果を共同で作品を作ることによって、より深い思考力の育成へとつながることを期待しています。作品分析の解説はアーサー王専門の研究者 Andrew Lynch 教授が担当します。

2日目は創作の表現方法を学び、実践します。物語の構造分析から創作への手ほどきはアニメ『ガンダム』の設定・神学考証を担当したストーリーアーキテクトの小関章ラファエル氏が講師を務め、身体表現法は文学座の俳優・脚本家の瀬戸口郁氏が担当します。3日目は準備と発表です。発表の媒体は、物語を視覚表現と結び付ける絵本や紙芝居制作（アニメ作品制作の希望者は秋学期に継続可能）あるいは身体と音楽を結び付けた劇空間の創作など、総合的な「教養言語」による発表を期待しています。プログラムと参加申し込みの詳細は7月下旬にWebで公開します。芳醇なこの機会をお見逃しなく。定員20名（<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/gp/> 秋学期にもワークショップを複数回予定しています）。

(不破有理)

2010 年度春期公開講座： 実験で学ぶ気象の教室（～ 6/12）を終えて

2010 年度春期公開講座「実験で学ぶ気象の教室」が、5 月 22 日より 6 月 12 日まで、毎週土曜日 10:00-12:00 の時間で、日吉キャンパス第 2 校舎 222 号室において、計 4 回開講されました。身近な気象について、実験や観察を通して学んでもらう、少人数の体験型講座です。参加者は、一般 14 名、塾員 1 名の計 15 名（うち女性 8 名）で、21 歳の学生さんから 77 歳の男性まで、幅広い年齢層の方に来ていただきました。

簡単に各回の内容を紹介します。第 1 回「風」では、どうして風が吹くのかをメインテーマに、大気の成り立ちから色の話（空の色、虹や蜃気楼、オーロラ）を行いました。初回なので、簡単な自己紹介と、実証科学としての自然科学の説明、日吉の自然科学教育の歴史についても紹介しました。第 2 回「雲」では、様々な雲を観察するとともに、実際に雲を作る実験もしてもらい、雲ができて浮かぶしくみを学んでもらいました。第 3 回「渦」では、なぜ低気圧の渦巻き方向が決まっているのかを学んでもらい、天気は西から変わる理由、地球規模の流れに思いを馳せていただきました。第 4 回「熱」では、地球温暖化について、現在までの知見と、その影響、対策の最前線まで学んでもらいました。また雪結晶の生成実験の観察もいただきました。

講座の雰囲気はとても良く、皆さん積極的に取り組んでいただけました。たくさんの質問が出たのも印象的です。今回の講座が今後の発展につながっていただければ幸いです。（杉本憲彦）



教員サポート

2009 年 11 月 18 日（水）、教員サポート「少人数セミナーの指導法について——アカスキのノウハウを盗もう！——」が開催されました。教養研究センターが開講する「アカデミック・スキルズ」は、複数教員による共同担当体制、プレゼンテーションコンペや優秀論文集発行などモチベーションを高める取り組みなど、ユニークな特徴を持っています。近年、日吉の教員が大学 1、2 年生を対象にスタディ・スキルを教える機会が増えている中、少人数セミナーの効果的な指導法のヒントが多く紹介されました。（種村和史）

2010 年度春期公開講座： バッハ～深遠なる魂の響き～を聴く（～ 7/3）を終えて

6 月 26 日（土）および 7 月 3 日（土）の両日、日吉キャンパス春期公開講座 5「バッハ～深遠なる魂の響き～を聴く」が開かれました。バッハ時代のドイツ音楽思想や音楽理論を中心に研究を進めている佐藤望（商学部）がこの講座を担当しました。少人数講座の特徴を生かし、受講者の皆さんに予め自身の好きなバッハの作品を指定していただき、それについて各自のさまざまな思いや感想を語っていただき、対話形式での講座を進めていきました。

受講者の皆さんは、一般のバッハ愛好家の方、50 年来の慶應を知る元職員さん、会社役員の方、ご主人がバッハ好きでもっとバッハを知りたいと思われた主婦の方、こどもの頃のピアノ・レッスンで《インヴェンション》の演奏で苦しめられた方など、10 名が集り、語り合い、学びあう 2 日間を過ごすことができました。

1 日目は器楽曲を中心に、有名なバッハの《メヌエット》は、実はバッハの作品ではない話や、バッハの旋律はなぜ語りかけるのか、抜け目のない完璧な作品よりも少し粗が目立つ曲の方が人の心を打つのではないかなど、などの話題で、盛り上がりしました。2 日目は、声楽曲を中心に扱いました。不思議な作品である《ミサ曲 ロ短調》の由来や、《マタイ受難曲》のなかの「ペテロの否認」の箇所の音楽表現を学びました。

1 回が 5 時間という長時間の講座にもかかわらず、皆時間を忘れて、バッハの音楽の深く、楽しい世界に引き込まれて行きました。

（佐藤 望）

日吉行事企画委員会（HAPP）春学期の活動

日吉行事企画委員会（HAPP）は、春学期に新入生歓迎行事を実施しています。秋学期には、塾生および教職員から企画を募集し、審査を経て採択した催し物を主催・開催しています。2010 年度の新入生歓迎行事は、8 つの企画（計 11 の催し物）が行われます。毎年恒例となっている、「塾長と日吉の森を歩こう」、「環境週間」、そして「慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会」に加え、今年度においても著名な芸術家を招聘した意欲的なイベントが催されます。

秋学期のための企画公募の審査も順調に行われています。今年度は 11 件の応募がありました。最終的には、この中から 5 件程度の企画が採択される予定です。HAPP の活動の詳細は、HAPP のホームページをご覧ください（<http://happ.hc.keio.ac.jp/index.html/>）。

（石井 明）

事務局より

4 月より教養研究センターに参りました。センターの活動は、塾生はじめ各人の主体性を尊重し、皆で創り上げている素晴らしいものだと感じています。このような環境でお手伝いができることは大きなやりがいです。（下田和実）



Newsletter
2010. July No.16

慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for the Liberal Arts）

発行日：2010 年 7 月 15 日 代表：横山千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1 TEL: 045-566-1151 Email: lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>